

平成29年2月1日発行(毎月1回刊)

三田評論

MITA-HYORON
2
2017 No.1208

特集

サイバーセキュリティの展望



慶應義塾

防衛大学校と慶應義塾

国分良成

防衛大学校長、慶應義塾大学法学部客員教授



拡大する自衛隊の役割

皆さんこんにちは。ご無沙汰しております。私は慶應義塾から防衛大学校（防大）に移り、すでに五年目が終わろうとしています。本日は、私の防大生活における中間報告をさせていただきます。私は、防衛大学校を心から愛しています。それは、学生たちは誠実で素晴らしい若者ばかりで、また卒業生の皆さんも一緒にいて気持ち豊かになるような人たちばかりだからです。

実際に防大に入ってみると、世間での一般のイメージとはおそろろかなり違い、相当にあたたかいところですよ。もちろん規律は厳格です、すべてがピシッとしている世界ですが、しかし、それだけに、そこにいる人々の心はあ

たかい。そんな感じを私は受けており、一緒に働いていて気持ちのいい人が多いですね。

現在、自衛隊は、非常に忙しくなっています。自衛隊の役割はきわめて多岐にわたっていますが、言うまでもなく、国防・安全保障、これが最大のテーマであり、最重要の任務です。また、つい最近も南スーダンでの自衛隊派遣の話がさかんに行われていましたが、それだけではなく、海賊対処などでも活躍しています。今後も国連の要請に基づいた形でのPKO（平和維持活動）をはじめ、いわゆる国際平和協力活動は減ることはないと思います。

世界の安全保障環境は、年々厳しさを増しています。私どもの世代は、いわばソ連を見ながら仕事をしていたわけですが、いまはご承知のようにもっと複雑化しています。

しかも、自衛隊の活動が多様な形で世界に広がっているのでも、こうした急激な安全保障環境の変化に対応することは容易ではありません。

さらにもう一つ、自衛隊の仕事で予想以上に期待が大きくなっているのは、特に東日本大震災以来、災害対応と復興支援という役割です。自衛隊は現在、世論調査では信頼度が九三%にのぼっていて、日本の中で最も信頼される組織とされています。かつては、自衛隊や防衛大学校の存在そのものが否定されたり、斜めから見られるような時代が長く続いていたことを考えると、状況は大きく変わりました。ある人が、「これまでは愛される自衛隊を目指したけれども、これからは裏切れない自衛隊になってきたな」と言っていました。われわれは表に出る役回りではありませんせんが、最後の砦として、国民・国家を守るという崇高な任務に精励しなければなりません。

本日は少し防大の内部についてお話しさせていただきます、それが実は慶應義塾との非常に深いつながりを持っているというお話をさせていただきますと思っています。

教育と研究のバランス

正直に申しますと、私は防衛大学校に移って反省していることがあります。それは、私自身の慶應での三十年以上にわたる教員生活において、自分は本当に真剣に教育をし

たのかということですよ。もちろん時間も割いたつもりだし、学生もかわいがったつもりですが、本当の意味で教育をしたのか、問われているような気がするのです。

いま防大で、ほとんど毎日のように、学生教育をどうすべきかについての議論に長い時間を費やしています。教育とは、若者に生きる夢や希望を与えることだと思います。あるいは、夢や希望そのものではなくても、そういうものをつかみ取るうえで、ある種の気付き、契機を与える。これが教育ではないかと、私はこの五年間で実感しています。防大では、教職員全員に「すべては学生のために」をスロガンとして徹底しています。

いったい、大学とは何なのか。これもよく考えます。防大は大学ではなく大学校ですが、大学の役割は、社会人、市民としての使命感、つまりミッションを発見する場ではないかと思えます。自分自身が社会のために何をやるのか、やるのかということですね。

私に「大学」について語る資格が十分にあるとは思いませんが、やはり教育と研究のバランスが重要だと思えます。いまは、研究が非常に重視されています。それで先生方はみんな忙しい、忙しいとおっしゃる。そして学校の業務もやらされて大変なことになっていると。私に言わせれば、そんなに大したことはないというのが正直なところですよ。これを防大に来て、非常に強く感じています。

大学の教員が研究するのは当たり前で、研究者である以上、研究に手抜きは許されない。しかし研究に偏りすぎて教育がおろそかになる、しかも研究といっても量の側面ばかりが肥大化していて、質はどうなのか、と感じることが多いような気がします。今日の大学は、入試と就職という人口と出口ばかりに関心を払って、自身の教育がおろそかになりがちです。慶應の場合、就職活動では学生たちが自主的に動くので、教員たちが苦勞することはあまりありませんね。大学では、教育をどのように研究に生かすか、研究をどのように教育に生かすかという議論が必要ではないかと思えます。

防衛大学の概要

防衛大学の教育方針は、広い視野、そして科学的な思考を持ち、豊かな人間性を育む、ということですが。私が経験したこの五年間の防大は、一言で言うと、リベラルアーツ・カレッジだということです。

そして防大は、慶應義塾とのつながり、紐帯が非常に強い。私自身、防大に移ってから、むしろ福澤先生の本をかなり読むようになりましたし、また慶應義塾の歴史を繙いたりすることも増えました。なぜかと言うと、防大の原点そのものが、慶應と非常に深い関わりがあるからです。皆さんは意外に思われるかもしれませんが、私の知って

いる幹部自衛官の方々、あるいは防大の同窓会の方々には、福澤ファンが多い。福澤の本をよく読んでおられ、信じられないほど福澤に傾倒しておられます。

自衛官の方々は皆さん同じ制服を着ていますから、一見個性がないように見えますが、実は、その制服の下は個性の塊です。それを抑えて仕事をしているのです。なので、引退が近づくと個性がはみ出してくるんですね。そこが非常におもしろい。個性の塊みたいな人たちが話していると、福澤が好きになるという気持ちも非常によく分かります。

防衛大学は、戦前の陸軍士官学校、海軍兵学校を解体し、戦後の民主主義の下での士官学校としてスタートしました。そこには戦前への反省が盛り込まれています。なぜ失敗したのか、何が間違っていたのか。その議論が徹底的に行われたという歴史が残っています。例えば、防大は陸・海・空が一緒になっていますが、それは、戦前に陸軍と海軍がバラバラであったことへの反省にもとづいています。これは当時の吉田首相の考えによるものです。

さて、防大は横須賀の走水（せうみず）にあります。浦賀と観音崎、ちよどべリーが来航したところの上にあつて、「小原台」と呼んでいます。一九五二年、保安大学校として、久里浜でスタートしたのですが、その二年後、いまの校地に移りました。これは、初代学校長であった榎智雄先生が決められたことで、当時京浜急行がゴルフ場をつくっていました

が、そこを説得してお願いしたということです。

大学と大学校がどう違うか、皆さんご存じでしょうか。一言で言えば、文科省管轄以外の学校は、すべて大学校です。防衛大学校や海上保安大学校などは、大学ではありません。したがって、もともと卒業生は、学士とは認められなかった。それが平成に入って、文科省が学位授与機構をつくり、学卒として認められるようになりました。

ただし、現在でもわれわれには、学位審査権がありません。したがって、防大には非常に水準の高い研究者がたくさんいますが、その先生たちは、学位を出す権利を持っていません。日本の大学はどこでも先生方が審査権を持っています。防大はそうではありません。修士、博士については、一〇〇%外部の、その分野のトップの先生たちが覆面審査しています。このことだけでも、防大の先生たちがどれだけ苦勞して教育にあたっているかがお分かりいただけると思います。この点に関しては、もう少し「大学」としての立場を認めてくれればと思っています。

防大には、「大学院」という名称がありません。「大学院」は、「大学」にしかつけれないからです。したがって、防大にあるのは「研究科」という名称です。理工学研究科、総合安全保障研究科のそれぞれ前期博士・後期博士課程を持つていますが、「大学院」という名称は使えません。

防大は、理系が中心の学校です。これも戦前が精神主義

に偏り、科学的思考が足りなかったことへの反省にもとづいたものです。吉田首相の考えで、開校当初は理系しかありませんでした。七〇年代に文系が入り現在に至っていますが、文系はだいたい二割ぐらいです。

防大は六つの学群、十四学科、六つの教育室を擁していますが、ほとんどが理系で、一学年は四八〇人、女性が約一割で、増員傾向にあります。それ以外に留学生在が全体で約一二〇人、約六%ですから結構多い。ほとんどは東南アジアからの学生です。いまのところ十一カ国から受け付けています。留学生のカリキュラムは五年間で、最初の一年は日本語の学習です。後の四年間で、教養・専門課程を学ぶこととなります。また、数週間から数カ月の短期留學生もいます。ちよどいまま、アメリカのウエストポイントの陸軍士官学校やアナポリスの海軍兵学校などから学生たちが十人ほど来て、四カ月の研修を終えて帰る時期です。

もちろん、防大からも学生を海外に送っています。年間約四十人で、数週間から一年の幅での派遣です。一番長いのが一年で、韓国に送っていますが、多くは一セメスター、四カ月とか半年などです。彼らは真剣ですから、三、四カ月でも、人が変わったようになって帰ってくる。われわれが見ているのも非常に頼もしく思います。

学生は、特別職の国家公務員ということで、手当が出来ます。月額十一万円強ですが、そこから食費などが天引きさ

れ、実際は八万円強ぐらいではないかと思えます。若干の期末手当も出るようになっていきます。

スタッフですが、学校長と副校長全体で四人、現在、教官が二九二人、事務官が二一七人、二四五人の自衛官、全体で七五八人です。教官は異動がほとんどありませんが、事務官と自衛官は、一年、長くて二年で交代しますのが、人事異動が非常に多い職場です。しかし、人が代わっても組織として継続させるのが原則です。副校長は三人で、一人は教官の代表、もう一人が防衛省の官僚、もう一人が幹事という呼称で陸将(中将)クラスです。ほかに海将補一名、空将補一名で、それぞれ訓練部長などの役でおられます。

学生は、二年のときに陸・海・空に分かれます。これは希望と適性によって分けます。割合としては、陸・海・空で二・一・一です。防大を卒業しても、すぐに最前線の自衛官になるわけではありません。そのあと、幹部候補生学校に進みます。したがって、実質は約五年間学ぶことになります。幹部候補生学校では陸(久留米)・海(江田島)・空(奈良)に分かれて、それぞれ半年から一年間、座学と訓練があります。例えば一般大卒の人が自衛官になる場合、この幹部候補生学校で防大卒業生と合流するわけです。

このところ、いわゆる有名大学から自衛官への道を進む人が非常に多くなっています。慶應からは陸・海・空合わせて、毎年五人ぐらいでしょうか。女性のパイロット志望的にみると、辞退者の数は毎年そんなに大きく変わっていません。

辞退の理由には、やはり、きつくてついていけないということもありますし、人の命を預かることにどうしても自信が持てない、あるいは健康上や家を継がなければならぬなど、家庭のさまざまな事情からということもあります。そういう人を、無理やり任官させることはしません。人々の命、そして国を守るという、心身ともに非常につらい仕事であることは分かっているのに、無理にはさせません。心に迷いがあると、部隊の統制などにも影響がでますので。いま申し上げた三本柱を簡単に紹介しておこうと思います。最初の「教育・訓練」ですが、一般大学の卒業単位が二三四単位なのに対し、防大は一五二単位です。防衛学という授業があり、これは防大の特徴です。国防論、軍事史、あるいは軍事技術、統率、戦略などです。自衛官の方が教えるケースが多いですが、来年度からは時代に合わせてサイバー戦も必修科目になります。

さらに、訓練の時間が四年間で合計一〇〇五時間あります。七月はほとんど九々一カ月、部隊に散って訓練をします。専門の訓練は、陸・海・空に分かれて二年のときからそれぞれ始めることになっています。

共通訓練として、一年の富士登山や遠泳などがあります。一年夏のこの遠泳では、泳げなかった人も含めて、毎年全

者も出ているようです。早稲田もそれぐらいで、東大・京大出身者などもだいたい同様の状況です。

ただし、防大卒業生のほうが四年間訓練などで鍛えていますから、最初はだいぶ差があるようです。一般大の卒業生がそれに追いついていくのは大変だと思いますが、頑張っています。そこを出ると、三尉、いわば少尉の格になって部隊に散っていくことになるわけです。

このようにして自衛官になっていくのですが、そのあとにも研修や試験も多く、海外留学の機会も増えています。

防大生の生活

防大の三本柱は、「教育・訓練」「学生舎」「校友会」です。言い換えれば、学業・服務・体力。さらにもう少し言い換えると、智・徳・体。このバランスを大事にしています。

防大には本当にたくさん行事があります。入校式に始まり、棒倒しで有名な開校記念祭。そして卒業式は、首相、防衛大臣が参列されます。卒業式の最後に、皆で帽子を投げることも知られています。

なお、卒業はするが、任官をしない、つまり幹部候補生学校に行かないという辞退者が毎年五〇〜八〇%います。それにはいろいろな理由があります。個人的な理由も多いのですが、最近では景気が上向いていて、有効求人倍率が高くなっていますが、こうした要因も影響します。ただし、総合員が横須賀沖を八キロ、六時間ほどかけて泳ぎます。やはり指導の仕方が見事ですね。毎年、感動的です。

二年ではきついカッター競技やスキー訓練があります。そういえばちょうど今日、三年生が硫黄島の研修に発っていきました。それ以外にもろん射撃研修などもあります。二つ目の「学生舎」は、宿舎、寮のことですが、ある意味で寮生活は、防大生の生活の根幹になります。学生舎は、四つの大隊に分かれています。大隊一つが約五〇〇人です。その中がまた四つの中隊に分かれています。さらにそれぞれの中隊が三つの小隊に分かれます。小隊という一番小さい隊でも、一隊約三十〜四十人です。小隊長というだけでも、数十人を統率しなくてはならないわけです。なお、大隊、中隊、小隊のそれぞれに、陸・海・空自衛隊から若い幹部が指導官として日常的に付いています。

学生舎では、一年から四年まで、留学生を含めて全員と一緒に暮らします。いま人数が非常に多くなっていて、だいたい八〜十人部屋ですが、勉強部屋と寝室に分かれています。寝具をきちんとたんでいないと、先輩にガサツとやられてたまたみ直し。あるいは身の回りのものが整頓されていないと先輩に怒られる、というような世界です。

ほとんど日本語の分からない、日本に来たばかりの留学生も一緒に暮らします。そして、たった一年でどうして日本語がそんなにできるのかというぐらいになります。それ

ほどに見事に留學生が育つていっています。

日常生活は、朝六時起床で、一日のうちに点呼が何回かあります。これが結構大変で、服のアイロンがけや、ズボンの折り目がきちんとしていなければやり直します。靴が磨いてなければこれもやり直します。そういうことを一人一人、お互いに点検しています。

国旗掲揚・降下の時間が来たら、必ず正対をします。それはわれわれも同じです。そして、課業行進もあります。授業に行くとき、それぞれの教室に行くスタイルが決まっています。実験のときは作業着、座学の場合は常装でこのかばんを持つ、など決まっています。それぞれ隊を組んで行進して教場（教室）に行きます。その行進自体が訓練です。つまり、きちんとパレードができるようになるためのものです。

第一大隊から第四大隊で、第四大隊が一番長い距離を行進するので、第四大隊がパレードが一番うまくなると言われます。授業の後は校友会（部活動）があり、消灯は二十時三十分ですが、延長は可能です。

平日外出は原則一切禁止です。授業関係の研修や見学に行く以外で、外に出ることはできません。いわゆる「脱柵」を何回もやると、それだけで退校処分になることもあります。もちろん、授業を何回か勝手にサボるだけでも厳しい処分があります。

しています。先日は低学年を中心に演劇祭もありました。

そして、棒倒し。これはぜひYouTubeでご覧いただきたいと思っています。これはただ倒すだけではなく、相手はどういう作戦で来るかといったことをお互いに事前に課報したりします。ピリオオバトル（書評ディベート）は、いま多くの学校でも行われています。隊歌コンクールでは、それぞれの大隊代表が、歌とパフォーマンスを競います。また断郊競技会、これはクロスカントリーです。ただし、荷物と背囊を背負って、女性も一緒で、必ず全員でゴールしないといけないので、一番遅い人に合わせないといけない。チームワークですね。それに持続走、つまりマラソン大会があります。

パレード、体力測定、カッター、水泳競技会、英語能力、演劇祭、棒倒し、ピリオオ、隊歌、断郊、持続走、この全十一種目の総計で年度最優秀大隊を選びます。それぞれ点数化するわけですが、みんな必死に頑張ります。昨年度は第三大隊が優勝しました。

校友会とは、部活動のことです。ただし、防大では学生全員が体育会に所属します。しかし、練習する時間がほとんどありません。毎日十七時十五分から十八時三十分まで、着替えなどの時間もありませんから、結局一日に一時間ちょっとくらいしかできない。ですから、休日に練習します。授業をさぼって運動をやるなんてことはあり得ない

土日の外出は可ですが、一年生の場合は制服着用です。また、校門を通過する際は、必ず制服着用です。つまり、二年から四年までは、外に出てから私服に着替えたので、何人かで学校の近くに下宿を借りて、そこで着替えて町に出て行きます。日曜夜の門限が近づくと、みんな走るように帰ってきます。

一年生は夏休みなど正式な休暇以外、基本的に外泊ができません。しかし二年から四年までは、二十日前後、外泊が可能です。もちろん、国家公務員ですから、休みはそんなにありません。正月休みなどはありますが、普通の大学生の半分以下、三分の一ぐらいでしょう。

昨年度から、年度最優秀大隊を選ぶことにしました。種目は全部で十一あります。パレードや体力測定、カッター競技会もあります。これは二年のときの登竜門で、海上で激しいボート漕ぎ競争となります。これを終えると二年生として認められるというもので、非常につらい競技です。私はいつも海上で応援しているだけです（笑）。それから水泳競技会。いろいろな泳法や着装のままのレース、教職員対抗レースもあります。私も毎年エキシビジョンで副校長や幹事と出ているので、学生たちが「リョウセイ」コールで応援してくれます。

英語能力競技会もあります。これはTOEICの点数を競うもので、一年間で三百点伸びたような学生を個人表彰

（笑）。もしそういう学生が慶應にいたら、ぜひ防大を見習って、学生の自分に戻っていただきたいと思っています。ただ、そうすると、強くなるかもしれませんが、リーグで二部、三部か、それより下という校友会が普通です。でも彼らはやはり日頃から鍛えていますから、総合的な運動能力は高いと思います。女性も立派な体力と精神力を持っています。文化部や同好会もいろいろありますが、いずれにしても大事なことは、体力とチームワークです。そして同時に、自分の好きな活動に参加して、そこで個性を発揮してもらうということです。

卒業の少し直前には、卒業ダンスパーティーがあります。ここで一生の伴侶に出会うということもあるようです。なぜなら、日頃はほとんどそういう機会がないからでしょう。ただ最近では週刊誌などで「防大生は婚活でモテる」というような記事も出ていて、それは分かるような気がします。

防大の目的とは

さて、防大は、幹部自衛官の養成が目的です。学生は、「義務の宣誓」を必ず行います。「私は、防衛大学校学生たるの名誉と責任を自覚し、日本国憲法、法令及び校則を遵守し、常に徳操を養い、人格を尊重し、心身を鍛え、知識を涵養し、政治的活動に関与せず、全力を尽くして学業に励むことを誓います」というもので、入校式のときに、全員

にやってもらいます。

そして、防大生活において学生は、「広い視野と豊かな人間性を持ち、道義をわきまえ、積極的にかたよりのない立派な性格徳操を具備するとともに、幹部自衛官の職務の特質を理解し、これに適応する基礎的資質を体得した伸展性のある自己を確立することを目標とする」と規定されています。つまり、四年間の教育と訓練を通じて、国家・国民を守り、世界平和に貢献する使命感 (Mission) を育成することです。公のため、そして人のために一生を捧げる DNA を植え付ける。これがわれわれに課された教育目標であります。

防大でバリバリの自衛官ができるわけではありません。実際には部隊に行つてからすべてを経験することになります。そのための人間的土台づくりとして、学業と体力と精神修養、つまり智・徳・体のバランスを重視するのです。それは彼らが将来、人の生命をお守りする、あるいはそれに関わる仕事だからであり、危機に面する機会が多いからです。

危機に遭遇したとき、決断力やリーダーシップに欠けていたら困ります。また、フォロワーシップ、つまり部下のことをきちんと分かつていなければなりません。ということ、初代学校長の時代から、繰り返しつくり上げてきたわれわれのモットーは、「真の紳士・淑女にして真の武人たれ」

防大は、もちろん学業だけやっているわけではありません。体育大学のような体力錬成も行っています。さらに、宗教大学のような精神修業も行う。つまり、三つの種類の大学でやることをいっぺんにやっているのです。こんな大学は他にないということで、私は、防大は日本一の大学だと申し上げています。日本に防大は一つしかありません。私はこれまで世界中の士官学校を回っていますが、防大が世界一の士官学校になれるという確信を少しづつ持ちつつあります。それはいろいろな理由がありますが、何よりも、まず陸・海・空が一体化している学校がほとんどありません。どこの国でも、陸軍と海軍ではあまり仲がよくないといったことが見られます。あるいは、理系・文系の融合も防大の特徴です。そして、防大の持つ「和」の精神があります。防大に来る留学生は、実によく定着します。ですから、世界中からいま、防大に学生を預けたいという要望がたくさん来ています。現状ではとても受け入れきれないので、基本的にはアジアに限るという形にさせていただいています。また日本人の美徳でもある清潔感、あるいは、大学院 (研究科) を持っていることも防大の特徴です。

さらに、現在の自衛隊の将官のおそらく八割以上が防大卒であるということです。ちなみに、ご紹介したように防大には三人の副校長がいて、一人は幹事と言いますが、現在の陸上幕僚長を務める岡部俊哉陸将は、以前私のもとで

です。これが、防大のいたるところに掲げられています。

また、こうしたことをもとに学生たちが自主的につくり上げたのが学生綱領です。現在も引き継がれていて、「廉恥・真勇・礼節」という言葉があります。これも防大のいたるところに刻み込まれています。

こういった防大の建学の精神は、やはり戦後の非常に厳しい時期を受けてのものだと思います。防衛大学校つてただの軍事学校じゃないのか、昔の軍国主義ではないのか。このような一方的なレッテルを貼られたり、昔の世代には、制服を着ていると水を掛けられたり、石を投げられた方も結構いたようです。そのような中で耐えてきた歴史があり、その中でつくられてきた一つの文化であるということです。

世界一の士官学校を目指す

防大は私が着任した二〇一二 (平成二十四) 年、創立六十周年を迎えました。私は着任した際、六十周年の記念の年だけ騒いでいては駄目で、六十一年目が大事だ、ということを上げました。また着任後すぐに、刑事法に違反するような服務事案や、いじめ事案もありました。それらの経験を踏まえて総点検し、日本一の大学、世界一の士官学校を目指そうと「新たな高みプロジェクト」を立ち上げました。

幹事として尽力してくれた方です。このように、防大に来る自衛官は、ロールモデルとして学生に示しています。

さらに、新設した教養教育センターでは、この春も坂東玉三郎さんにお越しいただくなど、文化に関する授業を非常に増やしております。また、このセンターでは英語教育にも力を入れていきます。英語は自衛官の場合、命に関わります。いま聞いた英語のなかに、*no* の一語が入っていたかいないか、コンマゼロ何秒の世界で判断を下さなければいけない。ですから、やはり英語は徹底的にやらなければいけないということになります。また、国際交流センターを設置し、バラバラに存在していた国際交流業務を一元化しました。加えて、今年からグローバルセキュリティセンターをつくり、防大の特色を生かした学内外の共同研究を行うことにしました。防大は教育が中心ですが、レベルの高い教官たちの研究を奨励する必要があると感じたからです。

リベラルアーツ・カレッジとしての防大

最初にも申し上げましたが、防大校長の立場にみると、リベラルアーツ・カレッジを運営しているような感覚を覚えます。カレッジと呼ばれるところは、いわゆる学生寮を必ず持っています。イギリスのカレッジでは、学生はみんな寮で厳格に暮らしています。つまり、学校生活で起こっ

た問題を毎日仲間同士で解決しないといけない。それによって大人になっていくというのがカレッジです。ですから、このカレッジの文化を、本当の意味で持っている日本の大学は、ほとんどないと言っていると思います。

防衛大学校では、三恩人と呼ばれている方々がおられます。一人は吉田茂、言うまでもなく、元首相です。そして、小泉信三元慶應義塾長、そして横智雄先生です。防大の資料館にも、このお三方の展示をさせていただいています。そして、このうちのお二人が塾出身です。

吉田茂は、先ほど申し上げたように、陸・海・空の統合をはかりましたし、理系を重視しました。これは戦前に対する反省にもとづいていました。さらに、少なくとも初代からの学校長はあくまで民間人を登用しようとしていました。私も、世界中の士官学校会議に出席しますが、校長はほとんど軍人です。私はシビリアン（文官）の学校長として会議に出席していますが、世界的にみて珍しいことだと思えます。

以前、現財務相の麻生太郎大臣にお会いした折、ひとつのお話を伺いました。麻生大臣が、おじいさまの吉田茂から聞いたお話です。吉田が駐英大使のとき、辰巳栄一という駐英武官がその下にいました。その後、陸軍中將になる人ですが、この人は英米派で、アメリカ、イギリスとの戦いは絶対にノーと主張した方です。この辰巳が、戦後防大

横智雄と慶應義塾

横智雄は一九二五年、三十四歳で板倉卓造先生のとを受けて二代目の体育会理事に就任され、体育会の合宿施設である山中山荘を主導的に建設し、同時に体育会の各施設を次々とつくっていった。その中で小泉先生が特に感激したのが、テニスコートでした。こうした体育会における横の働きからか、小泉新塾長は横を常任理事に任命しました。このとき横先生は四十二歳でした。

横智雄は塾の常任理事として、どのような仕事を担当されたのか。当時の最大の事業は、林毅陸塾長の時代から始まっていた、日吉キャンパスの建設です。日吉に大学の予科をつくる、さらに藤原工業大学との連携によって工学部を新設していくという計画がありました。これらを横常任理事が担当しました。いまの日吉の第一校舎、第二校舎といった校舎を建設するとともに、陸上競技場をはじめ体育の施設も建設していきました。日吉の銀杏並木など造園に關しても、業者を回って横先生が選定されたようです。

天現寺の幼稚舎の建設についても横常任理事のお仕事だったようです。その横先生が一番思いを寄せたのが、日吉寄宿舎の建設です。これは現存していますが、一九三七年に完成しました。当時、個室で床暖房、水洗トイレが付き、ガラス張りの風呂というものです。三つの棟をつくって、

の創設についても吉田にいろいろと進言していたのを子供心に覚えている、と麻生大臣は話されていました。

吉田茂は、防大の校長を最初は小泉信三先生にご依頼しました。しかし、自分はいま東宮御教育参与という仕事をしているため、一番信頼できる横智雄を推挙したいという話になったわけですが、それまで吉田首相は横智雄と面識がなかったのですが、紹介されてお会いして、その場で即断したと言われています。

一九三三（昭和八）年に小泉信三が慶應義塾長に就任し、一九四七年まで務められました。そのときの学務担当常任理事が横智雄です。小泉塾長の任期すべてにわたって、常任理事として務められました。

当時は、慶應義塾には常任理事が財務担当と学務担当の二人しかおられなかったようです。横智雄は、一九一四（大正三）年に塾の理財科を卒業し、オックスフォード大学に留学して哲学者アーネスト・バーカーのもとで民主主義の政治思想を学び、一九二〇年にニュー・カレッジをファースト（首席）で卒業されました。日本人で初めての首席卒業です。翌二一年に帰国されて、法学部の教員になられた。その後、法学部の教授になられ、そして国際連盟慶應支部（いまの慶應国際政経研究会）の会長を務められます。ちなみに、私も慶應国際政経研究会に所属しておりましたので、学部のとときから、横智雄という名前は記憶にありました。

真ん中の横の初代の舎監もされたそうです。やはり、ノギリスのリベラルアーツ・カレッジへの思いが非常に強かったのではないかと感じます。横先生は、「気品の泉源、智徳の模範」という言葉を、防大に来てからもしばしば使われていました。そういった礼節の重視を盛んに言われていました。

その後、一九四一（昭和十六）年から太平洋戦争が始まります。学生と教職員の戦時動員が始まり、四三年からは生徒動員で、学生たちがキャンパスから消えていきます。そして横先生は予科（日吉）の主任になりますが、戦況が悪化し、一九四四年になると、いわゆる「陸にあがった海軍」の時代になります。

連合艦隊司令部が場所を考えた結果、有力候補に日吉キャンパスがあり、日吉への移転を海軍が決定します。その交渉にあたったのも横先生のように、一九四四年の九月に移転しています。寄宿舎は司令部の作戦室や士官の宿舎になっていきました。その後、地下壕の建設が始まったのは皆さんご存じだと思います。

先日、防大のスタッフたちと一緒に、地下壕の見学をさせていただきました。やはり当時の米軍は相当丁寧に土地情報を得ていて、地下壕の周辺や出入り口あたりを中心に激しく爆撃していたようです。周辺の民家もだいたい被害を受けています。慶應義塾は最大の戦禍を受けた大学の一つ

と言われていますが、日吉キャンパスも相当に破壊されました。小泉塾長、横常任理事の落胆はいかばかりだったかと思えます。

小泉塾長は戦争で子息も亡くされ、そのあと空襲で顔に大やけどを負われました。一九四七年一月、横先生は小泉塾長とともに、常任理事を退任されておられます。

小泉信三と横智雄

さて、この三人の関係をもう少し詳しく見てみたいと思います。横先生の書かれたものによると、吉田茂は「今日民主主義の時代である。多くは昔のままではいかぬ。士官教育また然りである」と語っていました。このような考えには、先ほど紹介した辰巳氏のアドバイスなどもあったのかもしれない。吉田茂は、首相時に二回、それ以外にも五回、計七回防大に来られました。

小泉先生は十数回来られています。そして、防大での講演集が、『任重く道遠し——防衛大学校における講話』（甲陽書房）という一冊の新書になっています。小泉先生は、時にはご自分から、防大に行きたいと横先生にお願ひしたようです。小泉先生はこのように言っています。「横智雄さんは私の多年の親友であり、私が十年余り慶應義塾の塾長をしておりました時に、横先生は（…）副塾長のような位置にいて終始私を助けられた無二の親友であります」

しかし晩年の先生については、英語の mellow という字を思わせる（『防衛の務め』二九九頁）。mellow とは「円熟」という意味でしょうか。

横智雄の防大での功績

では、防大で横智雄先生は何をされたのか。横先生のさまざまな論述を拜読していると、非常に哲学的な表現が多い。これは特に、イギリスの政治哲学者アーネスト・バーカーから学んだことが大きかったのではないかと思えます。と同時に、やはり福澤を相当読み込んでいるというのが分かりますし、また、小泉先生からも相当に影響を受けている。そして、イギリス時代のカレッジの生活からの影響、また、海軍大将であった井上成美などからの影響も感じられます。井上は軍内でリベラルな立場を取っていたことで知られ、戦後は非常に質素な生活を三浦半島で送っていました。横先生は、井上のところにも何度か足を運ばれました。

横先生は一九五二（昭和二十七）年から、一九六五（昭和四十）年までの約十三年にわたって学校長を務められました。六十歳から七十三歳までです。いくつか先生の言葉を紹介したいと思います。

第一期生に対して語ったこととして、「第一に諸君の任務は偏することなき均衡のとれた人物を要求しているこ

（『任重く道遠し』九三頁）。さらに、次のように、正直に言っておられます。「防衛大学校長の仕事は気の毒だ。（…）国防のごとき大切のことに世間は冷やかである。軍閥の復活だといひ、学生にも悪口雑言を浴びせる。さぞ苦勞の多いことであろう。心から心労ねざらぬ申す」（横との会話、横智雄『防衛の務め』中央公論新社、二〇〇九年、三〇三頁）。

では、横先生は小泉先生に対してどのような感情を抱いていたのか。横先生は、昔、小泉塾長が学生に対して語っていた有名な「塾長訓示」を思い起こし、自身がいつのまにかこの言葉に影響を受けていたことを吐露しています。「一、心志を剛強にし容儀を端正にせよ。一、師友に対して礼あれ。一、教室の神聖と校庭の清浄を護れ、一、途に老幼婦人に遜れ」（『防衛の務め』二九六頁、一部修正）。

横先生は防大で、例えば電車やバスに乗ったときは、座ってはいけない。特に制服を着ているときは、きちんと礼儀をわきまえること。そして、人に対して範を示さないということなどを、いろいろと学生に言っていたようです。それは振り返ってみたら、小泉塾長が言っていたことを実践したに過ぎないと、自ら漏らされています。

さらに、横先生はこのようにも言っています。「塾長時代の小泉先生は、持するところ高く、気性も強く、理路整然としてことばの切れ味も鋭かった。人はこれを尊敬した。

と、第二に諸君の任務は民主制度に対して的確な理解を要求していること、これです（一九五三年第一期入校式式辞、『防衛の務め』二二二頁）。この二つのことを、新入生に対して伝えています。そして、防大生活における自由と規律に関しては、「規律なくして真の自由はなく、遵法精神または正義に服従する意思なくして真の民主制度は成立しません。（…）われわれは個性の発展を重視するとともに、大きな期待をこれにかけるものであります。（…）個性は野放しのものでなく、また個人の自由は放縱を意味するものではありません。（…）正しいことを目指すことにおいてのみ個性の発展があり、正しき行いにおいてのみ自由があるのであります」（同書二二三頁）と語られています。

実は、防大の草創期、慶應の英文学者であった池田潔先生の「自由と規律」が必読書になっていました。それは私たちぐらいの世代の防大でも、やはり必読書だったようです。

「上官にして紳士」（同二二七頁）、「高い身分には義務が伴う」（Noblesse oblige）（同二九九頁）、「規律、自主、信頼」（同三十頁）これらの言葉が学校のいたるところに刻み込まれていて、特に「ノブレス・オブリージュ」という言葉は横先生の胸像にもあります。また、「われわれは大體三つの目標を考えております。一つは立派な社会の一人であ

るとともに有用な国民の一員であること、他の一つは立派な部隊幹部であること、さらに他の一つは立派な学識を持つ人たることであります」（同四十六頁）。このようにも語られています。

先ほどご紹介した学生隊、それから校友会については、「学生隊と校友会を、われわれは知能技術における教室、訓練における訓練場、または様々の所で行なう演習の場と同様に、幹部自衛官の人の養成場と考えているのであります」（同二八頁）。これもいわば、自主自律の精神の涵養ということになります。

「この特異独特の教育体系は、理工学に重点をおきますが、これを専門教育または職業教育と考えることを極力避けて、むしろ全体を流れる教育上の主義は、一般またはリベラルの色彩の濃いものであるのです。専門教育を急ぐの余り、諸君の年齢期にあつて修得せねばならぬものを失うことは、厳に慎まねばならぬとして参りました。人生への準備であり、諸君の一生のことを考えることが諸君のためでもあり、また自衛隊を利益するものであるとの信念によつたものです」（同九十頁）。つまり、専門教育に最初から走るのではなく、その人間的な基礎をどうつくるかに、すべての本質があるということです。人間性の土台づくりが、自衛隊に対しても利するものであると考えられています。防大で学んでいる学生たちは、いまずぐに部隊のトップ

任から解放されるものではない」（同二三頁）。

ここで思い出すのは、福澤先生の、「一身独立して一国独立す」、「独立の気力なき者は、国を思うこと深切ならず」という言葉です。横先生は晩年、塾の職員だった昆野和七さんに、このように語っておられます。「塾（慶應義塾）ではやれなかつたことを、もう一度、防衛大学校でやつた」（昆野和七「横智雄先生の追憶」『横乃実 横智雄先生追想集』昭和四十七年）。

つまり、小泉塾長のもとで横先生は日吉の建設などを通じて、おそらくカレッジをつくりたかつた。大学の予科において人間として一般教養を教え、きちんとした人間的な基礎をつくらうとした。その思いを込めて、おそらく、オックスフォードを心に描きながら日吉をつくられたと思えますが、それが結局、戦禍にまみれてしまった。思いが遂げられなかつたという無念が、横先生にはあつたように思えます。

そして、小泉元塾長はおそらくそれをご存じだつたからこそ、ご自身が吉田茂から防衛大学校の学校長を打診されたとき、横智雄先生を最初に推挙された。このような歴史があつたのだということ、われわれは理解できるのです。

慶應義塾との歴史的な紐帯

吉田茂、小泉信三、横智雄という、防衛大学校の原点に

に立つわけではありません。本当の意味で、この国や国民を守る中核を担うようになるのは、だいたい二、三十年後です。つまり、二、三十年後に彼らがどのような状況の中で、何をしているのか、そのとき何が必要かを考えて、いまの教育をやらなければならないということです。

したがって、われわれは、横先生の教えを繰り返し読み直している毎日です。横先生が非常に好きな言葉に、「心に遅れをとつていないか、腕に力は抜けていないか」というものがあります。先生の本に何度も出てきます。これはつまり、智・徳・体の融合ということです。また先生はパスカルが非常に好きでした。小泉先生はどちらかというと、孔子・論語からの引用が多いですね。しかし、横先生は西洋思想からの引用が圧倒的に多い。横先生に小泉先生が「論語を読むといいですよ」というお話もされたようですが、横先生は主に西洋思想から取つてこられています。

「パスカルは」「力の伴わぬ正義は無力であり、正義の伴わぬ力は抑圧である」と言つた。防衛組織に正義は常に伴侶でなければならぬ。もしこれなくば、防衛の力は道義的に無力であるか、あるいは忌むべき暴力に墮するであろう」（同二九〇頁）。「平和は進歩に欠くことのできない要因である。しかし、国の独立を見失うての平和は何の意味もない。また、国民の幸福とその理想の実現に国民の基本的自由は大切である。しかし、このために国民は国を守る責

立ち返り、その思想、歴史の変遷を見てきましたが、慶應義塾との歴史的な紐帯を感じざるをえません。それは一言で言えば福澤精神につながつていくものです。「一身独立して一国独立す」に原点があり、なぜ、幹部自衛官の方々で福澤が好き人が多いか、というところにもつながります。小泉信三と横智雄という二人の人物を通して、防大に福澤精神が注入されたのでした。

実は、私の恩師である石川忠雄は、防衛大学校の学校長を依頼されたことがあります。私が学部から大学院に行く一九七六年前後のことだと思います。石川先生が防大に移られるという噂を私も聞き、大学院に進学したので心配になつたことがあります。当時、京都大学の猪木正道先生が防大の第三代学長でしたが、猪木先生も就任時、京大で反対運動にあつたそうです。その猪木先生が一番信頼していた学者の一人が、石川忠雄でありました。それは、ご子息の猪木武徳先生からも伺っています。

しかし、結局一九七七年、石川先生は塾長に就任され、防大校長をお断りになつたという経緯があります。その後一九九〇年代に入り、おそらく石川先生のところにもたご相談が行つたのかもしれませんが、塾の松本三郎先生が推挙されました。松本先生は、石川塾長時代の十六年のうち十二年を、学事担当理事として塾の発展に貢献されていまして、湘南藤沢キャンパスの建設などは、松本先生のご尽力

「山食」の 猪熊弦一郎



1991年夏、解体直前の旧「山食」内にて

がなければ難しかったのではないかと思います。その松本先生が、第六代の防衛大学校長に着任され、一九九三年から二〇〇〇年まで務められました。

松本先生の防大でのお仕事にも、やはり慶應精神が感じられます。特に、卒業生を大事にするというところで、ホーム・カミング・デー、ホーム・ピジット・デーなど、卒業生に対する配慮を考えられたり、また民間の資金などをどう活用するかということも考えておられました。松本先生は塾の常任理事時代、石川塾長とともに、創立一二五年の募金を三田会等から集めるのに相当苦勞されていたのを、私もずっと下から見ておりました。松本先生はその後、防衛大学校協力会という支援機構を、地元横須賀を中心に全国的につくることに奔走されて、そこに一定の資金を集めて、学校行事に対する各種の支援や、留学生に対する支援活動などを進めることに尽力されました。ある意味で、福澤以来の塾の精神を松本先生も継承されているなど感じます。

おそらく皆さんの中には、横智雄という名前を聞いたことのない方もおられるのではないかと思います。また今日お話ししたような歴史もご存じないかもしれません。しかし、本日ご紹介したように、さまざまな人々の熱い思いが結晶した中で歴史はつくられていくのであり、そういう全体の構成の中に歴史というものはあるのだということが分かります。私は防衛大学校ですでに五年も勤務させていた

だいて、改めてその歴史を緘くなくて、人間的にも非常に成長させていただいていると思います。

「義塾」という言葉の本来の意味は、誰にでも教育を施す学塾ということですから、つまり、お金を取らずに、いろいろな義捐金などによって平等に教育を施すところですね。これは実際には私学では大変なことですが、私どもの防大は幸いに国立であり、また学生たちは若干の給料もいただいていますので、そういう意味では、いわば「防衛義塾」をつくっているということにもなると思います。

最初に申し上げたように、私自身、慶應時代にあまり深く考えなかったこと、教育とは何かということ、防大でいま改めて考えさせていただいているとともに、日本で唯一無二の学校をつくる事業に関与させていただいて、ますますこのようなことに完成形はありませんので、永遠の課題だと思えますが、今後も福澤以来の義塾の精神を原点に持ちながら、さらにチャレンジをしていきたいと思っています。そして、いずれまた、次の方にうまくバトンタッチをして防大精神、つまり横イズムを繋いでいくつもりです。

本日は、このような貴重な機会をお与えくださいました。誠にありがとうございました。

(本稿は、平成二十八年十二月十三日に行われた第七〇三回三田演説会をもとに構成したものである)